

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開—

笹川慶子

トム・D・コクレンとアジア —ユニバーサル映画のアジア展開—

笹川慶子

はじめに

2001年、大阪に、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン (Universal Studios Japan, 以下USJ) が開園した。いったいなぜUSJは、東京ではなく、大阪に誕生したのだろうか。

大阪市の説明によれば、ユニバーサル・スタジオ(現NBCユニバーサル傘下、以下ユニヴァーサル社)の親会社であったミュージック・コーポレーション・オブ・アメリカ (Music Corporation of America, 以下MCA) と大阪市のニーズが偶然一致したためであったという。1980年代、MCAはアジアのどこかにテーマパークを開園したいと考え、土地を探していた。最初は、バブル絶頂期の東京で探したが、東京ディズニーランドと競合するため、関西圏で探すことになる。同じ頃、大阪市は、重工業の衰退した此花区の利用転換を考える必要があった。淀川河口のデルタ地帯にできた此花区は、大阪重工業発祥の地として栄え、大きな工場が林立していたが、1985年のプラザ合意で円高が進み、重工業が立ち行かなくなっていた。大阪市は閉鎖した日立造船や住友金属工業の工場跡地にUSJの誘致を決め、バブル崩壊直前の1990年、MCA幹部に積極的なアプローチを開始、1993年には正式に招請する。交渉開始からUSJが完成するまでにユニヴァーサル社は、松下電器産業やカナダのシーグラムなどに買収されるが、USJの計画は継続され、2001年に晴れて開園の運びとなる。

しかし、大阪とユニヴァーサル社の関係は実は、今からおよそ100年前、20世紀初頭にまで遡ることができる。

ユニヴァーサル社はアメリカ企業の多くがまだ欧州市場にばかり注目していた時代、アジア市場の開拓に本格的に乗り出した先駆的会社である。日本映画史言説においてユニヴァーサル社——当時の正式名称はユニヴァーサル・フィルム製造会社(Universal Film Manufacturing Company)、1912年創設——は、低予算映画を作る二流の映画会社と見下されつつも、日本に初めて進出した外国の映画会社として重視されてきた¹⁾。

ユニヴァーサル社の支社は1916年、旧東京市京橋区南伝馬町3丁目14番地(現東京都中央区京橋3丁目1番地)に開設された。同社が日本に紹介したサスペンス満載の連続映画「名金」(The Broken Coin, 1915)や若者向け恋愛心理劇のブルーバード映画『毒流』(Shoes, 1916)などは日本映画界に大きな波紋を巻き起こし、純映画劇運動など日本映画の革新につながった。ユニヴァーサル社が日本映画の近代化に果たした役割は大きい。

本稿の目的は、初代ユニヴァーサル社東洋総支配人であったトム・D・コクレン(Tom Dakin Cochrane, 以下コクレン)の足跡を辿ることで、欧米の資本主義産業がアジアの映画市場を開拓する過程を解明するとともに、そういった地球規模の交渉の中に20世紀初頭のアジア、そして日本の位置を捉えることにある。具体的にはコクレンがユニヴァーサル社の命によりアメリカを出発し、東京に支社を設立するまでの経緯を、次の3点に留意しつつ、検証する。それによって歴史に埋もれたユニヴァーサル社と大阪の関係が明らかになるだろう。

- 一、アメリカ映画産業がアジア市場に進出する過程。大西洋を横断する映画流通に関する研究に比べて、太平洋を横断する映画流通に関してはほとんど研究がない。アメリカの映画会社として初めてアジア市場の開拓に本格的に乗り出すユニヴァーサル社の足取りを辿ることにより、欧州が支配していたアジア映画市場にアメリカが進出する過程を明らかにする。
- 二、日米映画流通経路の形成過程。ユニヴァーサル社の日本上陸はこれまで、内向きの文脈でしか語られてこなかった。すなわち、同社の映画がどう日

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

本映画界を刺激し、どんな影響を与えたか、である。逆に、ユニヴァーサル社がどういった経緯で日本にいたるのかは不問にふされてきた。グローバルな視点から日本を見つめ直すことにより、日米間の映画流通経路の形成過程を解明する。

- 三、アジア市場における日本の歴史的な位置。欧米主導によりグローバル化するアジア映画市場の中で、日本はどのように位置づけられていたのか。ユニヴァーサル社の日本上陸を、映画流通のグローバル化がアジア市場に波及するプロセスの一環として捉え、地球規模の映画交渉における日本の位置を明らかにする。

ユニバーサルに於ける
ユニバーサル社支配人コクレン氏

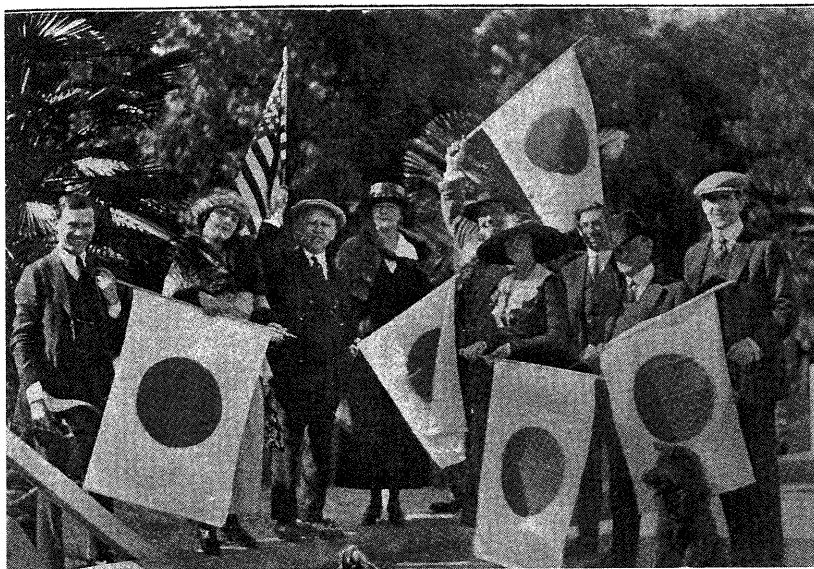


写真1 右から二番目がコクレン、左から三番目が社長のレムリ (『活動評論』1919年7月号、写真頁より転載)

一、トム・D・コクレンの軌跡

まず、コクレンとはいったい何者なのかについて明らかにしておこう。コクレンは草創期の日本映画産業とアメリカ映画産業をつなぐ架け橋となった人物である。だが、日本映画史の言説に、彼に関する記述を見出すのは極めて難しい。記述があっても断片的にすぎず、内容も薄く、ユニヴァーサル社の東洋総支配人という以外はほとんどわからない。それゆえ今回発見された内務省警保局保管の「感謝状交付ノ件伺」（内務大臣決裁書類・昭和13年（上）、作成者：内務大臣正三位勲一等 末次信正，132 - 198頁，計67頁）は、彼の重要性を知ることのできる唯一かつ最も貴重な史料である。

起案 昭和十三年三月二日

警保局警発乙第一一一号

感謝状交付ノ件伺 パラマウント映画株式会社東洋総支配人トム・デイ・コクレン氏ハ昭和十二年十一月九日紐育ニ於テ死亡シタル所同氏ハ大正四年来朝以来我が国映画界ニ貢献シタル功績尠カラザルモノアリト認メラルルニ付左案ニ依リ感謝状交付相

この伺書は1937年11月9日にコクレンがニューヨークの病院で他界したあと²⁾、日本映画界への彼の貢献に対して、内務大臣の末次信正からコクレンに感謝状を贈るべく用意されたものである（大日本映画協会も感謝状を贈った）。推薦人には、当時日本を代表する大会社の重役陣ら——東宝の大橋武雄、松竹の千葉吉蔵、日活の石井常吉——が名を連ねている。推薦理由は、「幼稚未組織なる本邦映画事業の各方面を刺激し、これが改善向上を促進し、本邦映画事業を今日の盛大に導けるは同氏の努力に據る所尠なからず」（144頁）であった。

伺書の略歴を参考に、日本におけるコクレンの主な功績をまとめると、次の5つに絞られる（139-143頁）。

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

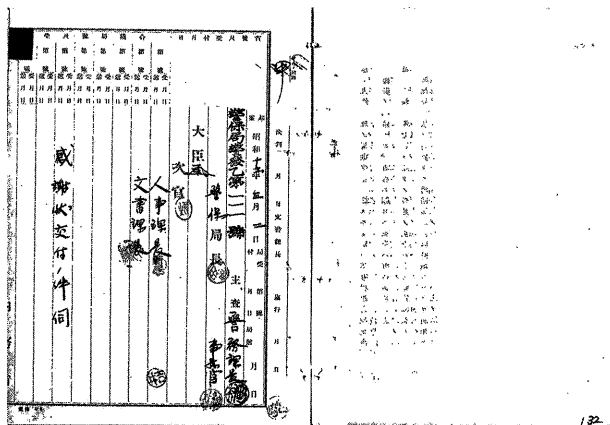


写真2 発見された内務省警保局保管の「感謝状交付ノ件何」(内務大臣決裁書類・昭和13年(上), 作成者:内務大臣正三位勲一等 末次信正, 132頁)

- 1) ユニヴァーサル社の東洋総支配人として来日, 日本初となる外国映画会社の支社を設立し, 連続映画やブルーバード映画などを日本に紹介して日本映画の革新の動きを作った。
- 2) 日本に映画の自由配給制度を紹介し, 日本の映画配給業に先鞭をつけ, 独立系映画館の存立を可能ならしめた。
- 3) パラマウント社に転じ, 同社の東洋総支配人としてサウンド映画の普及に尽力, 『モロッコ』(Morocco, 1930年製作, 1931年日本公開)を嚆矢とする日本語字幕のスーパーインポーズを創始し, 定着させた。
- 4) 松竹パラマウント興行社(通称, SP)を結成し, 日本の興行界に多大な影響を与えた。
- 5) それまでアメリカで現像し日本に搬送していたプリントを, 日本に新設された極東現像所やJ.O.現像所に依頼するとともに, 指導することで, 日本の現像技術と現像産業の発展に寄与した。

略歴には記されていないが, それ以外にも, 新しい映画宣伝法(映画館でも雑

誌編集者でもなく製作者が主導権を握る)を紹介する一方、『活動之世界』(大正5年1月創刊)や『活動評論』(大正7年12月創刊)など映画ジャーナリズムの育成に貢献したことを加えることができよう。コクレンが日本映画および日本映画産業の発展とその近代化に貢献していたことは疑いようがない。

しかし、問題もある。この伺書には、コクレンの履歴、略歴、業績のほかに、『ニューヨーク・タイムズ』紙などアメリカのメディア13社による訃報記事の日本語訳がおさめられている³⁾。それぞれコクレンの活動内容については、おおむね的をえた記述だが、混乱するのは年代である。たとえば、コクレンがユニヴァーサル社の命を受けてアジアに向かうのは1911年とも、1914年とも読める書き方であり、日本支社設立は1911年、1915年、1916年、1917年とさまざまに記載されている。また、家族の構成も、何人兄弟がいて彼が第何子かも、不明である。

だが、アメリカにコクレンおよびコクレンの家族に関する記録が残されている。1880年と1910年のアメリカ合衆国国勢調査記録および複数の旅券記録を照合すると、トム・D・コクレンは、1869年12月22日、西ヴァージニア州ウィーリングにて、父ロバート(Robert)、母マーサ(Martha)の第五子、四男として生まれたことがわかる。

1880 United States Federal Census

Name: Tom Cochran

Age: 10

Birth Year: 1870

Birthplace: West Virginia

Home in 1880: Wheeling, Ohio, West Virginia

Race: White

Gender: Male

Relation to Head of House: Son

Marital Status: Single

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

Father's Name: R. H. Cochran

Father's Birthplace: Ohio

Mother's Name: Martha M. Cochran

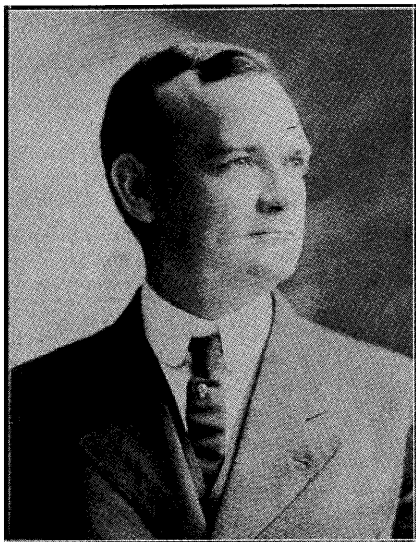
Mother's Birthplace: New York

Household Members: Name	Age
R. H. Cochran	43
Martha M. Cochran	43
Ella Cochran	18
Nigley Cochran	16
Witt Cochran	14
George Cochran	12
Tom Cochran	10
Mary Cochran	5
Philip Cochran	3
Robert Cochran	1

苗字は、1880年国勢調査記録に「Cochran」とあるが、1910年国勢調査記録および彼の旅券記録の多くは「Cochrane」である。名前は、映画雑誌や新聞では「Tom」と「Thomas」(日本でもトムとトーマス)の両方が使われていたが、国勢調査記録と旅券記録は、見た限りすべて「Tom」であった。また、彼の誕生年は、旅券記録のほとんどが1869年と記すことから、1880年国勢調査記録にある1970年は誤りと判断した。夫婦の子供は全部で8人、上から順番に、エラ(Ella)、ネグレイ(Negleyが正しい)、ウィット(Witt)、ジョージ(George)、トム(Tom)、メアリー(Mary)、フィリップ(Philip)、ロバート(Robert)の6男2女である。この1880年の調査から約35年後、8人のうち5人までもが1912年に創設されるユニヴァーサル社で働くことになる。次男のウィットは宣伝、三男のジョージは監督、五男のフィリップは総務、四男のコクレンは製作と営業、六男のロバートは副社長(のちに社長)であった。

コクレン家とユニヴァーサル社の創設者のひとりカール・レムリ (Carl Laemmle) の関係は、レムリが映画業界に入る前から始まる。レムリがウィスコンシン州オシュコシュのコンチネンタル服飾店で働いていた頃、その店の宣伝を請け負ったシカゴの広告代理店がウィットとフィリップ、ロバートの経営による会社であった。そのロバートの後押しをえてレムリはまず、1906年2月にホワイト・フロント劇場を、4月にファミリー劇場をシカゴに開場し、10月には映画の貸付を専門とするレムリ映画サービス社 (Laemmle Film Service) を開業する。さらに1909年6月、ユニヴァーサル社の前身となるインディペンデント映画社 (Independent Moving Picture Company, 以下 IMP) をニューヨークに設立して映画製作に進出⁴⁾、インディアンの英雄を扱った988フィートの処女作『ハイアワサ』(Hiawatha) を1909年10月に公開した。さらに、このIMPを中核として1912年5月、独立系映画製作会社を集めてユニヴァーサル社を開業し、その製作部門をカリフォルニアに結集する。このレムリの事業拡大とともにロバートの兄弟たちは、彼の手となり足となり働くこととなる。

四男のトムは、最初から最後までレムリの側近として尽くした六男ロバートとは異なるやり方で、ユニヴァーサル社の発展に寄与した人物である。ニューヨークの『イブニング・メール』紙の宣伝部長として辣腕をふるっていたトムは、1909年、シカゴのレムリ映画サービス社が東部に初めて進出するとき、その東部代表に抜擢される。ニューヨークにおいてトムは映画の貸付業を営むほかに、製作会社ヤンキー映画社 (Yankee Film Company) の運営にも携わり、貸出する映画の数がまだ十分ではなかったレムリ映画サービス社に映画を供給した。その後、レムリがIMPを設立すると、トムはその製作部長としてIMPの処女作『ハイアワサ』を製作する。翌1910年4月、IMPは、アダム・ケッセル (Adam Kessel) とチャールズ・O・バウマン (Charles O. Baumann) 率いるニューヨーク映画社 (New York Motion Picture Company) と提携し、映画配給セールス社 (Motion Picture Distributing and Sales Company, 以下セールス社) を創設するが、その初代社長もトムが務めた (のちにレムリが社



Mr. Thomas D. Cochrane.

写真3 若き日のトム・D・コクレン
(*The Moving Picture World*, 1911
Sep 30, p. 6 より転載)

長)。セールス社は毎週20社以上の作品をリリースし、国内最大級の映画貸付会社に成長する⁵⁾。これが独立系の映画会社に配給力を与えることになる。さらに1911年からトムは、ニューヨークに新設されたマジェスティック映画社 (Majestic Motion Picture Company) の副社長兼製作部長となり、IMP からメアリー・ピックフォードを引き抜いて彼女の主演映画を次々製作し、セールス社ブランドの人気に貢献する⁶⁾。末弟のロバートがレムリの参謀なら、トムは、その先鋒としてレムリの映画ビジネス拡充を支えていたのである。

ところが1912年、トムは、レムリやロバートらほかの兄弟たちと袂を分かち、民主党のウッドロウ・ウィルソンが大統領選で「ニュー・フリーダム」をスローガンに掲げたその年、アメリカ映画産業は大きな転換期を迎える。レムリら独立系がセールス社を立ち上げる1910年4月、それに対抗した当時メジャーのモーション・ピクチャー・パテンツ社 (Motion Picture Patents Company, 以下MPPC) —1908年、エジソン社やバイオグラフ社などが中心となって組

織した主要映画会社のトラスト——は、市場の独占を企ててジェネラル・フィルム・カンパニー (General Film Company) を組織し、認可映画の全国配給を開始する。こうして配給網は全国に広がっていった。しかし1912年、司法省がMPPCは独占禁止法に違反するとの判決を下す一方⁷⁾、セールス社から分離したミューチュアル映画社 (Mutual Film Corporation) が3月に、ミューチュアル映画社のライバルとなるユニヴァーサル社が5月に誕生すると、独立系の勝利は決定的となる。ユニヴァーサル社の経営陣は最初、社長バウマン、副社長パトリック・パワーズ (Patrick Powers)、会計レムリ、総務ウィリアム・スワンソン (William Swanson) であったが、数週間後、バウマンは追い出され、社長レムリ、副社長ロバート・H・コクレン、会計パワーズに交替する。トム・D・コクレンの所属するマジスティック映画社は、ミューチュアル映画社に合流し、そこから作品を配給した。ところがその後しばらくしてトムは、フィラデルフィアのルービン製造社 (Lubin Manufacturing Company、以下ルービン社) ——旧MPPCの主要メンバーで当時国内最大級のスタジオをもっていた——に移り、1913年9月までには、フィラデルフィア撮影所とベッツウッド撮影所の工場長に就任する。

マジスティック映画社を辞めたコクレンが、なぜユニヴァーサル社に合流せず、兄弟と離れて、フィラデルフィアに赴いたのかは興味深いところである。ユニヴァーサル社を追い出されたバウマンとの信頼関係ゆえか、あるいはマジスティック映画社社長のハリー・エイトケン (Harry Aitken) に遠慮したのか、それともユニヴァーサル社が製作拠点を選んだ西海岸に行くのが嫌だったのか、現時点ではまだ不明である。ただ、1909年から1913年にかけてアメリカにおけるコクレンの足跡を辿るとわかるのは、彼が1911年にユニヴァーサル社 (あるいは、その前身となる会社) から東洋市場開拓の命を受けて日本に上陸したとはまず考えられない、ということである。したがって警保局の記録にある1911年トム渡日説はありえないことになる。

だとしたらコクレンは、いつルービン社からユニヴァーサル社に転じ、アジアに向かうことになるのか。米国に保管されたコクレンの旅券記録によれば、

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

1914年10月23日にフィラデルフィアでパスポートを取得したことがわかっている(下記)。その後、1920年まで毎年、アメリカで旅券申請を繰り返す。行き先は不明である。申請時の現住所は1914年だけフィラデルフィアのジャーマンタウンであるが、1915年以降はすべてユニヴァーサル社の本社であったニューヨークである。

U.S. Passport Applications

Name: Tom Dakin Cochrane

Birth Date: 22 Dec 1869

Birth Place: Wheeling, West Virginia

Age: 44

Passport Issue Date: 23 Oct 1914

Passport Includes a Photo: Yes

Residence: Germantown, Philadelphia, PA

すると、1914年10月23日発行の旅券だけは、ルービン社の社員として出国するためだった可能性は否定できない。しかし、1914年6月以降コクレンをルービン社の社員として報道する記事が見当たらなくなること、また1916年の秋にアメリカのメディアがコクレンのアジア渡航を2年前と述べていること、1914年の時点でルービン社はまだアジア市場に進出していないことから、コクレンは、1914年6月から12月のどこかでルービン社からユニヴァーサル社に移ったと考えられる。ゆえに1914年10月23日の出国は、コクレンがフィラデルフィアから引っ越す暇もなく、ユニヴァーサル社の社員としてアジアに赴くためだったと考えてよからう。

当時ユニヴァーサル社がアジア市場を強く意識していたことは確かである。だが、いったいつからユニヴァーサル社はアジアを意識しただのだろうか。定説では、第一次世界大戦の勃発でイギリスやフランス、ドイツといった欧州の重要な市場を失ったアメリカの映画会社が、新たな市場を開拓する必要に迫

られてアジア市場の開拓に向かうと考えられてきた。事実、1916年3月12日付『ロサンゼルス・タイムズ』紙で、ユニヴァーサル社の大株主のひとりパトリック・パワーズは、戦争による欧州市場の損失をアジア市場の利益が埋めていると述べ、アジア市場への期待を表明している。アジア市場開拓の先駆者であるユニヴァーサル社がコクレンをアジアに派遣するのが旅券の発行された1914年10月23日以降であるならば、まさにその定説通りである。

しかし実は、戦争の前からすでにユニヴァーサルがアジア市場を意識していたこともまた否定できない。なぜならユニヴァーサル社は、1914年6月28日にサラエボ事件が起こったのとほぼ同時期に、マニラにオフィスを新設しているからだ（後述）。この迅速すぎる反応は、同社が戦争の前からすでにカリフォルニアの太平洋対岸にあるアジア市場に注目していたことを示すといえよう。逆にいえば1912年、ユニヴァーサル社がカリフォルニアに製作部門を結集し、映画都市・ユニヴァーサルシティの建設にとりかかるのは、アジアを視野に入れた企業戦略であったのかもしれない。第一次世界大戦の勃発が、大西洋から太平洋への市場シフトを加速したことは確かであるが、戦争だけがアジア市場開拓の発端ではないこともまた確かなのである。

いずれにせよ、アメリカの映画会社として初めてアジア市場の開拓に本格的に乗りだしたユニヴァーサル社は、最も早かったフランスのパテ社に比べ、7年も遅れていたことになる。だが、それでも戦争による欧州映画会社の低迷、戦争当事国からの映画輸出の困難、アメリカの戦争景気、連続映画「名金」やチャップリンの喜劇映画などの人気追い風となり、アメリカはアジアの映画市場を欧州の手から一気に奪い去る。そのアメリカの先鋒としてアメリカ映画の市場を開拓したのがユニヴァーサル社であり、そのユニヴァーサル社の先鋒がトム・D・コクレンであった。

二、ユニヴァーサル社とアジア市場の開拓

コクレンとアジア

1914年にコクレンがアメリカを出発し、アジア市場に向かったのであれば、

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

いったい彼はどこをどう開拓したのだろうか。従来の日本映画史が示唆してきたように (あるいは問わずにきたというべきか)、コクレンはアメリカを出発したあと、まっすぐに日本に向かったわけではない。1914年の時点で彼の目標は、あくまでもアジアの市場であって、日本だけではなかったのだ。ならば彼はアジアのどこへ、まずは向かったのか。そして、なぜ大阪にたどり着くことになるのか。

カール・レムリ20周年記念特集である『フィルム・デイリー』誌1926年2月28日号には、同社の海外オフィス一覧が掲載されている⁸⁾。1926年の時点で既にユニヴァーサル社のオフィスは全世界に広がっており、アジアにも15の都市にオフィスがあった。

FAR EASTERN DIVISION

E. B. Rowe, General Manager

CHINA

SHANGHAI

N. Westwood, Manager

K. C. Way, Mgr. Tientsin

And Staff

JAVA

E. F. K. Borner, Acting Manager

And Staff

BANDOENG

SOERBAYA

Mr. Flinzner, Asst. Mgr., and Staff

E. Lambert, Manager, and Staff

FAR EASTERN DIVISION, Con't

PHILIPPINE ISLANDS

MANILA

J. N. Weir, Manager

And Staff

CEBU

H. W. Hope and Staff

ILOILO

W. Horstman and Staff

STRAITS SETTLEMENTS

SINGAPORE

K. H. Tann, Manager

And Staff

JAPAN

L. Prouse Knox, Manager

And Staff

TOKYO

A. Sherlock, Assistant Manager

Arata Tsukadi, Business Manager

And Staff

OSAKA

Makiguchi, Manager

And Staff

KYUSHU

Nagayama, Manager

And Staff

HOKAIDO

S. Shirokane, Manager

And Staff

INDIA

Chunilal Munim, Manager

And Staff

トム・D・コクレンとアジア
 —ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

BOMBAY
 Vasantreu H. Desai, Asst. Manager
 And Staff

MADRAS
 N. R. Desai, Manager
 And Staff

CALCUTTA
 A. V. Row, Manager
 And Staff

LAHORE
 A. S. Pandya, Manager
 And Staff

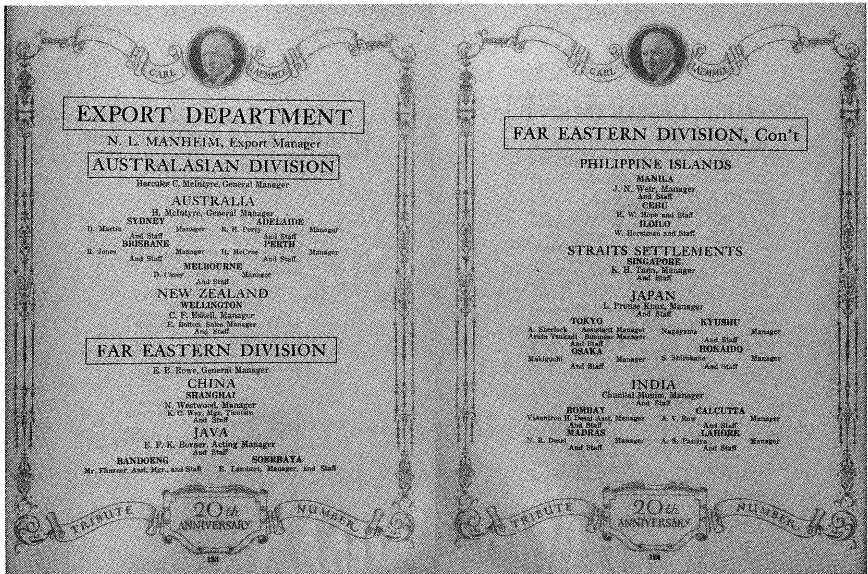


写真4 1926年2月時点のユニヴァーサル社極東オフィス一覧 (“A Tribute from the Export Department,” *The Film Daily: Carl Laemmle Tribute 20th Anniversary Number*, vol. 35, no. 48, 1926 Feb 28, pp. 123-124 より転載)

具体的には中国、ジャワ（現インドネシア）、フィリピン、海峡植民地（現シンガポールなど）、日本、インドの主要都市、すなわち中国の上海、インドネシアのバンドン、スラバヤ、フィリピンのマニラ、セブ、イロイロ、シンガポール、日本の東京、大阪、九州、北海道、インドのボンベイ（現ムンバイ）、マドラス（現チェンナイ）、コルカタ、ラホール（現パキスタンのラホール）である。コクレンは、そのうち、どの国の、どの都市を訪ね、オフィスを開いたのだろうか。

コクレンが1914年から1916年の2年間で歴訪した国や地域は、ユニヴァーサル社が1926年の時点でオフィスを持っていたアジアの国や地域とほぼ重なっている。アジアにおけるコクレンの足取りを報道した記事は、数は少ないが、皆無ではない。報道はほぼすべて、1916年にコクレンが2年間のアジア歴訪から帰国した際のものである。たとえば1916年11月12日付『ロサンゼルス・タイムズ』紙はコクレンが日本と中国、インドに映画貸付会社を設立し、最近帰国したと報じた。原文は以下の通り。

TOM COCHRANE, who has recently returned from the Orient, where he had charge of the establishment of exchanges in Japan, China, and India states that……

また、『ムーヴィング・ピクチャー・ワールド』誌1916年11月18日号は次のように記す。

Mr. Cochran [sic] has been two years in the Orient establishing Universal exchanges in Manila, Tokio, Singapore, Bombay, and Rangoon, Burma.

つまり、コクレンは2年間に「マニラ、東京、シンガポール、ボンベイ、ラングーン、ビルマ」を巡り、貸付会社を開いて帰国したという報道である。さら

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

にユニヴァーサル社広報誌『ユニヴァーサル・ウィークリー』1916年10月14日号の「日本通信欄」には、

The offices established by Mr. Cochrane are in Minami Denmacho, Kyobashi, and from here the business established in India, Java, the Philippines, the Straits and China, is directed.

コクレンが東京にオフィスを開き、そこから「インド、ジャワ、フィリピン、海峡植民地、中国」の市場を管理したとある。記事によって言及する国も地域もさまざまだが、それらの記事からコクレンは、1914年10月以降にアメリカを出国してから1916年10月頃までの約2年間で、少なくとも、日本、中国、インド、フィリピン、シンガポールおよびマレーシア（旧海峡植民地）、ミャンマー（旧ラングーン、ビルマ）、インドネシア（ジャワ）などの大きな都市を巡り、同社の市場を開拓していたことがわかる。コクレンがアジアにおけるユニヴァーサル社の配給地盤を築いたことは確かである。

それではコクレンはまず、アジアのどこに向かったのだろうか。おそらくフィリピンのマニラが最初だったと考えられる。なぜなら彼がアメリカを出発する前からすでにオフィスが設置されていたのは、マニラだけだからである。『ユニヴァーサル・ウィークリー』1913年9月20日号掲載の広告を見ると、ユニヴァーサル社の配給オフィスは全部で63店舗あるが、すべてアメリカとカナダにあり、アジアには一店舗もない。ところが1914年7月11日号の広告に初めて「PHILIPPINE ISLANDS: Manila - Universal Film & Supply Co., Universal Bldg.」の文字が加わる。つまり、フィリピンの首都マニラにユニヴァーサル社が、ユニヴァーサル・フィルム・アンド・サプライ社を設立したことがわかる。設立の時期は、雑誌の編集と印刷に必要な時間を差し引いて、1914年7月11日より前、おそらく6月、場合によっては、それ以前であろう。当時フィリピンがアメリカの植民地だったことを考えれば、アジア進出を目指すユニヴァーサル社が、その最初の拠点を、フィリピンの首都マニラに開くのは道理至極

である。フィリピンにおけるコクレンの軌跡は今後さらに調べる必要はあるが、彼がアジア市場開拓の第一歩をユニヴァーサル社がアジアに唯一所有していたマニラのオフィスから踏み出した可能性は十分に考えられる。

コクレンがフィリピンの次に訪れ、彼自身が開いたオフィスはどこだったのか。候補となるのは、フィリピン以外の国、すなわち中国、インドネシア、シンガポール、日本、インドであるが、可能性が最も高いのはシンガポールである。主な理由は次の5つである。

- 1) 20世紀初頭のシンガポールは、東西およびアジア各地を結ぶ交通網の発達した自由貿易都市として重要であり、フランスの映画会社パテ・フレール (Pathé Frères) が1907年からすでに総代理店をシンガポールに設立していたこと、
- 2) ユニヴァーサル社が南洋の貿易拠点であるシンガポールから、インドやインドネシアなどアジアの市場を管理していた形跡があること、
- 3) 1916年11月5日付『ロサンゼルス・タイムズ』紙が、2年間のアジア滞在中にコクレンはシンガポールとインドで大富豪と出会い、それぞれの地で代理店を開設し、シンガポールで出会った「裕福な日本人」と一緒に日本に向かったと報道していること、
- 4) 同じく、日本映画史家・田中純一郎も、コクレンはシンガポールから日本にきたと述べていること (『日本映画史発掘』冬樹社、1980年、107頁)、
- 5) 地理的条件や当時の汽船航路の状況から考えて、コクレンがシンガポールより先にインドやインドネシアに向かったとは考えにくいこと、

などである。したがってコクレンはまず、シンガポールに拠点を構え、そこからインドやインドネシア、ミャンマー、中国、そして日本へと足をのびたと考えてよいだろう。

コクレンがシンガポールにいつ到着したかは不明である。が、少なくとも、

1915年夏には滞在していたことは確かだ。というのも1915年8月5日、ユニヴァーサル社東洋総支配人であるコクレンは、シンガポールのハワード・C・マーティン (Howard C. Martin) とキム・ホク・タン (Kim Hock Tann) を同社の代理人に任用し、10月にはシアター・ロイヤル (Theatre Royal) およびハリマホール (Harima Hall) と独占契約を結び、オーチャード・ロード62-7番地にシンガポール支社を設立するからである。

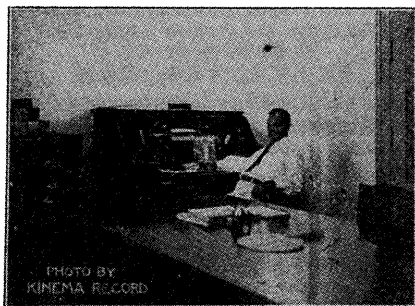
問題は、コクレンがいつシンガポールから日本にやってきたか、彼を日本に連れてきた「裕福な日本人」とは誰かである。報道した『ロサンゼルス・タイムズ』紙の記事には、個人名も、日付も記載がない。20世紀初頭のシンガポールには、中国に次ぐ大きな日本人町があったことから、その候補となる日本人の数も多い。しかし幸運にも、それを裏づける史料が日本に残されている。

コクレンと日本

『キネマ・レコード』誌1916年9月10日号に掲載された「当業者訪問記——刮目す可き新事項」は、日本におけるコクレンの足跡を示す貴重な記録である。同誌の記者が1916年7月22日に、旧東京市京橋区南伝馬町に新設されたユニヴァーサル社の「東京支社」を訪問し取材した。訪問の印象として記者は、「ユ社が東洋方面に拡張の企ては一朝一夕ではないのである。が漸くにして今日我帝都に其の支社を見るに至つたのである」と述べている(387頁)。重要なのは、その記事と同じ頁に掲載され、「PHOTO BY KINEMA RECORD」と明記された2枚の写真である。

左の写真はコクレンである。オフィスでひとり、机に向かっている。周囲には人がおらず、長袖のシャツという服装から、この写真が本当に記者の訪問した真夏の東京で撮影されたかどうかは疑わしい。ただ、『活動之世界』誌1916年9月1日号の記事「外国会社と握手せよ」に大隈重信侯爵が「米国のユニヴァーサルといふ大会社の支配人とかゞ来遊して居るさう」と述べていることから、1916年の夏にコクレンが東京に滞在していたことは確かである。

コクレンがいつ日本にやって来たかは、はっきりしない。ただ、『キネマ・



タム カツ クレ ン 氏
Mr. Tom D. Cochran



事務所内の支社員
Branch Members in the Office

写真5 左の写真はオフィスにいるコクレン。右は事務所、手前左が播磨
（『キネマ・レコード』誌1916年9月10日号、387頁より転載）

レコード』誌の記者が京橋の事務所を訪問する1916年7月22日より前に、コクレンが日本にいた可能性を示す足跡は2つある。ひとつはコクレンがシンガポールで上映した連続映画「名金」の日本上映である。横浜オデヤン座にて1915年9月26日に封切公開されたあと、10月10日から天活の浅草帝国館で上映された。ただし、「名金」を日本に輸入したのは横浜のニーロッパ商会（のちの平尾商会）である。それゆえ1915年にコクレンが日本にいたかどうかは曖昧とならざるをえない（ゆえに警保局記録の1915年渡日説は検証の余地がある）。

もうひとつの足跡は『活動之世界』の記者・鈴木百合子との接触である。田中純一郎によれば、記者の訪問を受けたコクレンは、多額の資金援助をして、同誌を活動家のための雑誌から映画専門雑誌に転向させたという（『日本映画史発掘』冬樹社、1980年、107-108頁）。事実、1916年2月1日発行の2月号43頁には、同誌を「本邦活動写真界の改善進歩に貢献」する雑誌に変更するとの宣言がある。また、1916年3月1日発行の3月号は、「名金」の特集号であり、かつてコクレンが働いていたルービン社と当時コクレンが働いていたユニヴァーサル社に関する記事も散見される。したがって、2月号を準備したであろう1915年12月か1916年1月頃にコクレンは日本にいたと考えられる。このことが

らコクレンは東京支社を設立する以前から日本に寄港し、市場開拓を模索していたことがわかる。しかし、この時点で彼はまだ支社設立の糸口をつかんでいない。ではいつコクレンは、その糸口をつかむのか。1916年7月22日に撮影されたもう1枚の写真が、その謎を解く鍵となる。

写真は、東京支社の事務所で撮影されたものである。事務員の服装から夏らしさが伝わってくる。重要なのは、その写真に播磨勝太郎（手前左の男性）が写っていることである。日本人の播磨が、日本で撮影された写真に写っているも、何ら不思議はない。しかし、この播磨という男がどういう人物かを知っていれば、コクレンをシンガポールから日本に連れてきた「裕福な日本人」が播磨であることは一目瞭然である。

播磨勝太郎は20世紀初頭、シンガポール映画興行街の発展に先駆的な役割を果たしただけでなく、シンガポールと日本の映画産業を結ぶ経路を切り開いた人物である⁹⁾。日本からアジアへの移民が急増する19世紀末、播磨は大陸に渡る。香港で写真館を経営するアジア主義者・梅屋庄吉と知り合い¹⁰⁾、1904年5月には2人でシンガポールへ移り、映画の巡回興行を行う。翌1905年6月、梅屋は映画装置とフィルム一式を播磨に譲って帰国し、東京に映画会社Mパテール商会を設立する。一方、播磨は、ビーチ・ロードにあるマツオ旅館を買収して改装し、「Matsuo's Japanese Cinematograph」という名で常設興行を始める。日本人町やラッフルズ・ホテルに隣接した立地の良さもあり興行は成功、その周りに同業者が集まって、シンガポール初の映画興行街が誕生する。まさに先駆者である。そして1911年に中国で革命が起こると、孫文を支援する梅屋は、日本から撮影技師・萩屋堅蔵を中国に送り、記録映画『辛亥革命』(The Chinese Revolution)を製作する。播磨はその映画を梅屋から直接購入し、シンガポールで独占上映をする。興行は大成功し、播磨は巨万の富を得る。その播磨の所有するハリマホールがユニヴァーサル社の連続映画「マスターキー」を上映するのが1915年9月である。10月にはユニヴァーサル社と独占契約を結び、コクレンがシンガポールに持ち込んだ「名金」を上映した。同じ月、コクレンはシンガポールに支社を開設する。こういった事実からコクレンをシンガ

ポールから日本に連れてきた「裕福な日本人」は、播磨勝太郎を指すと断定してよい。

注意すべきは、京橋に開設されたユニヴァーサル東京支社の親会社が、ニューヨークのユニヴァーサル本社ではなく、日本のユニヴァーサル・ハリマ商会であった点である。いったいユニヴァーサル・ハリマ商会とはどのような会社なのか。『日本映画事業総覧 大正拾五年版』（国際映画通信社、1925年、263頁）によれば、ユニヴァーサル社75%、ハリマ商会25%の歩合制で組織された、ユニヴァーサル映画の貸付会社であったという。おそらく税金の関係であろう、コクレンを含むアメリカ人社員3名の給与のみユニヴァーサル社が支払い、残りの給与や税金、営業費は播磨が支払った（1916年6月に播磨が逝去したという記述は誤り）。また、『キネマ・レコード』1916年8月10日号掲載の記事「播磨商会新たに米国ユニヴァーサル社と契約なる」によれば、大阪のハリマ商会は1916年「七月以後発売」されたユニヴァーサル映画の「東洋一手販売権」を獲得し、新しいオフィスを東京の京橋に設立したとある。ここでいう「東洋一手販売権」とは日本と中国の販売権を指す。このユニヴァーサル・ハリマ商会は、播磨が大阪に所有する「ハリマ商会の事務所を使って」設立された（田中純一郎『日本映画発達史』第1巻、中央公論社、1975年、257頁）。

ハリマ商会の事務所は、旧大阪市東区京橋3丁目61番地にあった。現在の北浜東、古くから淀川水運の要衝として栄えた八軒家浜の船着場の近くである。江戸時代この辺りには大名の蔵屋敷が集まり、船で全国各地から物資が運ばれてきた。播磨や梅屋の故郷である長崎の商人も多く住んでいた。『大阪地籍地図 土地台帖之部』（吉江集画堂、1911年）によれば、京橋3丁目61番地の持ち主は「高畑力松」とあり、播磨はそこを借りたと考えられる。また、同じ町内に「播磨新五郎」という履物商が住んでいたことから、縁者が京橋にいた可能性もなくはない。いずれにせよ、コクレンの日本市場開拓は、東京の京橋ではなく、大阪の京橋から始まっていたのである。

しかし、なぜ播磨はハリマ商会を大阪に開設したのか。播磨の大阪進出は、世界の映画流通が新たな局面を迎えたことと関係する。第一次世界大戦まで世

界の映画流通の中心はイギリスであった。欧州映画に限らずアメリカ映画でさえも、イギリスを経由して世界に配給されていた。そのイギリスの流通網を使って世界の映画市場を制覇するのがフランスのパテ社である。世界に先駆けてグローバル化を押し進めたパテ社は1907年、欧米企業として初めてアジアに進出する。シンガポールに総代理店を設置し、豪華なアルハンブラ劇場を直営してパテ映画を独占的に興行するのである。こうしてアジア市場はパテ社の独壇場となる。このパテ社のシンガポール進出により、パテ映画を上映していた播磨は興行が難くなる。新作の入手は困難となり市場も奪われ、新たな映画の供給元と興行先を必要とした。結果、播磨はシンガポールの外と積極的に交渉をもつこととなる。そのとき播磨が目指した場所のひとつが、自分の故郷であり、彼を映画興行に導いた梅屋庄吉のいる日本であった。1907年末もしくは1908年初頭、梅屋の口利きで播磨は、当時大阪最大の興行街である千日前に開場したばかりの文明館で興行する。播磨にとって日本で初めての興行である。文明館は、電気館に次いで大阪に誕生した2つ目の映画専門館であり、梅屋の経営するMパテー商会（日活の前身のひとつ）の特約店であった。その後、播磨は、浅草のキネマ倶楽部など関東にも映画を配給するが、大阪を活動の中心とする。1912年には、大阪興行界の実力者・井谷亀之丞（のちの千日前土地建物株式会社社長）が新築したモダンな石造りの洋風建築・第六愛進館の柿落とし興行にも播磨が映画を配給した。その播磨が1914年頃、『辛亥革命』の興行で得た巨万の富をもとに日本進出を企てる。そのとき彼の選んだ場所は、かねてから映画を配給していた大阪であった。そして、その播磨の築いたルートを辿ってコクレンは日本にやってくる。コクレンは播磨との共同出資によりユニヴァーサル・ハリマ商会を大阪に設立、そのユニヴァーサル・ハリマ商会がユニヴァーサル東京支社を設立する。

コクレンがアメリカから大阪にいたる過程は、20世紀初頭、世界の映画流通が新たな段階に突入り、欧米主導のグローバル化の波がさらにアジアにおよぶプロセスの一端を現代のわれわれに覗かせてくれる。第一次世界大戦中、ロンドンからシンガポールを経由する欧州航路に加えて、アメリカから日本を経由

する北太平洋航路を利用した映画の輸送量が増えると、アジアに進出する欧米の映画企業は増加する。とりわけアメリカ企業は、その拠点をマニラからシンガポール、東京、上海、バンドン、ボンベイ、さらに多くの都市へと広げ、その配給網は密度を増す。時を同じくしてハリウッドの映画産業は、飛躍的な発展を遂げ、それにともないアジアにおける日本市場の位置はますます重要となる。こうしてアジアの内部に、それまでと違う緊張と葛藤が生まれ、さまざまな文化的、経済的、政治的な力学の働く中でアジアの市場は、グローバルな映画流通の網目に取り込まれていったのである。

コクレンの日本上陸から約100年を経た今、歴史的な偶然によって結ばれたユニヴァーサル社と大阪の関係は、もはやすっかり忘れられてしまった。しかし、そのつながりを現代に、象徴的によみがえらせたのが、ユニヴァーサル社がアジアで初めて開園したテーマパーク、大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパンなのである。

おわりに

アジア市場の開拓を目指すユニヴァーサル社は1914年、かつてユニヴァーサル社の先鋒として働いていたコクレンをルービン社から呼び寄せ、同社の東洋総支配人に任命してアジアに派遣した。アメリカを出発したコクレンは、まずアメリカの植民地フィリピンを経由し、イギリスの植民地シンガポールへと向かう。1915年夏、シンガポールで現地代理人を任用し、シンガポール支社を設立したコクレンは、そこを拠点にアジア市場の開拓を目指す。ところが、そのシンガポールで播磨勝太郎と知り合う。その結果、コクレンは大阪にユニヴァーサル・ハリマ商会を設立し、その商会を使って1916年7月、東京にユニヴァーサル社の支社を開設する。そして極東本部を東京に置き、日本と中国、シンガポールを含む南洋におけるユニヴァーサル映画の取引きを管理した。コクレンがアメリカを出発する1914年、アジアにユニヴァーサル社のオフィスはフィリピンにしかなかったが、その2年後には、日本を中心とする映画配給網が構築されていたのである。

日本とアメリカを直結する映画配給ルートの構築は、アジア、とりわけ日本の映画配給に革命をもたらした。当時アジア市場に出回っていたアメリカ映画のほとんどは、ロンドン市場で取引された「セコハン」、いわゆる中古フィルムであった。そのため、フィルムの状態が悪く、到着に時間もかかった。だが、日本に支社を置くことによりユニヴァーサル社は、使い古しではない、鮮明なイメージを映し出せる綺麗なプリントを、太平洋を渡ってアメリカ西海岸から日本の横浜港に直送できた。結果、それまでのルート——アメリカから大西洋を渡ってイギリスへ、そこから地中海、インド洋を渡ってシンガポールへ、シンガポールからシナ海をのぼって日本へと運ぶ——より、ずっと早く、安く、映画を供給できるようになる。ユニヴァーサル東京支社の設立された1916年といえ、大戦により欧州映画の入手が困難になり、ロシア経由の露文字幕入り欧州映画が日本の観客の不評をかっていた頃である。アメリカから大量に直輸入された美しいプリントのユニヴァーサル映画の最新作が、日本の映画ファンの心をわしづかみにしたことは想像に難くない。その衝撃がやがて日本映画革新の動きにつながっていく。

従来、1910年代末に始まる日本映画の革新運動は、欧米映画に憧れる日本の先駆的な映画人が生み出したと考えられてきた。だが、もっと広い視野で時代状況を俯瞰すれば、その変革は、既に述べてきたような世界規模の流通変動が20世紀初頭に起こり、それが日本映画産業に巨大なインパクトを与えたことによりもたらされていたことがわかる。

アジアにおけるユニヴァーサル社の活動の軌跡は、アメリカ資本主義産業がアジア、そして日本の市場を開拓する過程とほぼ同義となる。従来の定説とは異なり、アメリカ企業は第一次世界大戦の前からすでにアジア市場を意識していたことは確かである。そのアメリカ企業が、アメリカの植民地フィリピンでも、イギリスの植民地シンガポールでもなく、太平洋の対岸に位置する英語のほぼ通じない日本の市場を重視したのはいったいなぜなのか。そこにはどのような日本の地理的、歴史的、政治的、経済的、文化的な条件がかかわっていたのか。これについては更なる研究が必要である。ただ現時点でいえるのは、20

世紀初頭にコクレンが日本をアジアの中でどう位置づけたかが、その後、アジアの映画市場の形成に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。過去は、現在と、つねに地続きで繋がっているのである。

*本研究は JSPS 科研費15K02207の助成を受けたものである。執筆にあたり関西大学松浦章教授に数々の貴重なご教示を頂いた。厚く御礼を申し上げます。

注

- 1) たとえば菅見恒夫は「二流のユニヴァーサルによって、日本人のアメリカ映画への最初の印象を与えられたことが幸福だったか、不幸だったかは別にして、初期の日本映画劇の作家たちが、ユニヴァーサル、ことにブルーバード映画に影響されていることは見のがせない」と述べている(『わがアメリカ映画史』雄鶏社、1956年、11頁)。
- 2) 1922年7月にコクレンはユニヴァーサル社からパラマウント社に転じ、その東洋総支配人となる。死亡時の住所は旧東京市牛込区市ヶ谷仲町35番地。家族は再婚した妻ドーラと、トミーとパットの息子2人(1937年11月11日付『東京朝日新聞』)。
- 3) 「感謝状交付ノ件伺」(内務省警保局内務大臣決裁書類・昭和13年(上)、1938年3月2日)の153-198頁に採録されたアメリカの報道記事は、「通信記事写」(詳細名不明)、「パラマウント映画会社宣伝部」[「パラマウント・セールズ・ニュース」]「フィルム・デイリイ」[「モオシヨン・ピクチュア・デイリイ」]「トリヴユーン紙」[「ポスト紙」]「ジャーナル紙」[「タイムス紙」]「テレグラム紙」[「ジヤパン・アドヴァタイザア」]「ニューヨーク・タイムス紙」[「モオシヨン・ピクチャア・ヘアラルド」]である。すべて日本語訳。ただし、アメリカで報道された記事を網羅的に採集してはいない。
- 4) *The Film Daily: Carl Laemmle Tribute 20th Anniversary Number*, vol. 35, no. 48, 1926 Feb 28; Dick, Bernard F., *City of Dreams: the Making and Remaking of Universal Pictures*, The University Press of Kentucky, 1997.; “Cochrane Now Laemmle’s Eastern Representative,” *The Billboard*, 1909 Jun 26, p. 39. 文献によって社名や設立日に揺れがある。本稿は主に『フィルム・デイリー』誌が特集したカール・レムリ20周年記念号の年表に依拠した。
- 5) “The Sales Company Announces: The Grandest Program of Moving Picture Releases in All the World,” *The Moving Picture World*, 1910 Jul 9, p. 91に掲載された週間プログラムを以下に記す。新作公開の曜日が会社ごとに決められていたことがわかる。

Every Monday..... ECLAIR, IMP, NESTOR, YANKEE

Every Tuesday..... BISON, KINOGRAPH, LUX, POWERS, THANHOUSER

トム・D・コクレンとアジア
—ユニバーサル映画のアジア展開— (笹川)

Every Wednesday..... AMBROSIO, ATLAS CHAMPION, ELECTRAGRAFF,
MOTOGRAPH
Every Thursday..... CENTAUR, CINES, FILM d'ART, IMP
Every Friday..... BISON, DEFENDER, KINOGRAPH, LUX, THANHOUSER
Every Saturday..... CAPITOL, CARSON, COLUMBIA, GREAT NORTHERN,
ITALA, POWERS

- 6) “Another Independent Manufacturer,” *The Moving Picture World*, 1911 Sep 30, p. 6;
“Owen Moore and Little Mary with Majestic,” *The Moving Picture World*, 1911 Oct
21, p. 217.
- 7) MPPCの力は1913年から急速に弱まり、主要メンバーも存続が危うくなり、1918年
には解散する。たとえばルービン社は1916年に倒産した。弱体化の要因としては、ほかに
1) コダック社との生フィルム独占供給契約の終了、2) 長編映画製作への消極的
な姿勢、3) スターシステムの不採用、4) MPPCが所有する特許権の失効、5) 独
占禁止法違反の判決、などが指摘されている。
- 8) “A Tribute from the Export Department,” *The Film Daily: Carl Laemmle Tribute
20th Anniversary Number*, vol. 35, no. 48, 1926 Feb 28, pp. 123-124.
- 9) 播磨勝太郎に関しては、拙稿「海を渡った興行師・播磨勝太郎——20世紀初頭のアジ
ア映画市場におけるシンガポールと日本」『関西大学文学論集』関西大学文学会、第64巻、
第4号、2015年3月、23-47頁を参照。
- 10) 梅屋庄吉は頭山満、犬養毅、宮崎滔天らと交流があった。中国の孫文、フィリピンの
エミリオ・アギナルド、インドのバルカトゥラーなどアジアの革命家たちを支援した。